

新聞英語における有標的語順

小山 久美子*

On Marked Word Order in Newspaper English

Kumiko KOYAMA

要 旨

英語におけるいわゆる有標の語順について、新聞英語を言語資料に用い、実際にどのように用いられているか、その機能を検証する。本稿で取り上げた前置文、倒置文、分裂文、*do support* は強調したり対比を示したりする効果があるといわれている。事件や出来事を伝える新聞で実際にどのような機能を果たしているのかを中心に考察した結果、強調や対比を表すだけでなく、トピックを導入、橋渡しし情報の流れを生かすという一挙両得の効果をあげていることがわかった

キーワード：有標的語順、前置文、倒置文、分裂文

1. はじめに

英語はいわゆる SVO 型で、これが無標の語順 (unmarked word order) とされる。日本語は、比較的語順のしぼりがゆるやかであるが、英語の場合は無標でない語順、すなわち有標の語順 (marked word order) を用いると、そこに何らかの意図があると解釈される。たとえば、前置 (fronting)、倒置 (inversion)¹、分裂文 (clefts)² などは強調や対比を表すために用いられる³。(1) は前置文、(2) は倒置文、(3) は分裂文、(4) は *do support* を用いた強調の例である。

- (1) a. Why didn't you tell me? Such things you must tell me.

*助教授 言語学・英語学

- b. Standing on the sand is a beach hut built like a mini-mosque.
- (2) a. On the long wall hung a row of Van Gough.
b. Then came the turning point of the match.
- (3) a. It was his voice that helped me.
b. What I want is something to eat, now! (Biber et al. (1999))
- (4) He never did understand how she felt. (Huddleston & Pullum (2002))

口語では強勢や音調で強調を表したりするが、文語で強勢があることを示すときは太字や大文字などを用いる。それ以外に強調を示したい場合に上記のような方法がよくみられる。これらの方法のなかには、単に強調のためだけではなく、情報の流れのために用いられるものもある。小山 (2003) では *it* 分裂文と *wh* 分裂文がトピック導入に用いられるということを新聞英語を言語資料に用いて示した。かといって、強調の機能を全く否定するというのではない。たしかに、強調にも用いられていることは事実である。

そこで、本稿では英字新聞を言語資料に用い、特に強調や対比との関係を中心に、英語における有標的な語順の使用について考察する。したがって、*do support* は語順とは関係ないが、強調を表す手段であり無標文には出現しないので今回はこれも考察の対象とする。

2. 焦点と強調

有標的な語順の使用をみる前に、語順と深く関わりのある焦点 (focus) について定義をしておく。

焦点については多くの学者が言及しており、おおむね次のように述べることができる。

- (5) 焦点は発話において際だち、情報としての重要度の高い要素である。

Biber et al. (1999) によれば、どんな節にも少なくとも1つの焦点があり、そこに強勢や *nuclear intonation* が置かれる。これはとりもなおさず、そこに強調が置かれていることを意味するという。通常、焦点は文末に置かれ (*end focus*)、焦点の置かれたものが情報上は価値があつたり新しい情報ということになる。

高見 (1995) は、「文頭の主題の位置は旧情報を表わし、文の焦点や新情報を置くことができない。」と述べている。

- (6) a. Yesterday, a man with blue eyes came.
b. ?*By taxi, a man with blue eyes came.

(6a) が容認可能な文であることから、時を表す副詞である yesterday は旧情報で文の焦点ではないことを示しており、(6b) が容認されないことから、手段を表す副詞句である by taxi は新情報で文の焦点であることを示しているという。確かに、文頭は情報上の価値の低いトピックがくるといわれている。

しかし、節の始めに焦点が置かれる場合も当然ある。Biber et al. (1999) は、場所を表す副詞句 (locative adverbials) が主語の前にくるとそこに焦点が置かれると述べている。

- (7) Inside the house Mr. Summers found a family of cats shut in the bathroom.

(7)の文頭の副詞句 Inside the house は主語の前にあり、そこに焦点が置かれている。もちろん、文末の bathroom にも焦点があるので、二重焦点(double focus)ということになるという。実際、副詞句が文頭にくる例はたくさんみられる。副詞は、出現位置が比較的自由であるといわれているが、文副詞以外の副詞の無標の位置は文頭ではないので、文頭にあることは有標であることを示す⁴。

同様に、(8) は形容詞が文頭にきた例で、文頭に強調があるといわれる。

- (8) Brilliant that was!

Biber et al. (1999) によると、(8) の文は、強意語である totally を用いた That was totally brilliant! よりも brilliant が文頭にあることによって強調されているという。

このように、文頭はトピックとして旧情報を表すといわれているが、実際には文頭にも焦点が生じることがあるということがわかる。

3. 前置文, 例置文, 分裂文

先にも述べたが、通常の語順と異なる語順をとるということは有標 (marked) であり、そうすることには何らかの意味がある。主語—述語の語順を転倒させるだけでなく、句の一部を前置したり、分裂文にしたりすることによって、通常以上の注目を引こうとしている。そこで、

この章では通常と異なる有標的な語順をとる前置文、倒置文、分裂文についてその諸特徴をみておく。

3.1 前置文の特徴

先にも述べたが、(7) (8) のように主語を飛び越して或る要素を置くのが前置 (fronting) である。前置される要素は、目的語としての名詞句や補文 (complement clause) や述部などである。

- (9) a. Why didn't you tell me? *Such things* you must tell me.
b. Sandy moves ahead. "*This* I do not understand", he said.
c. *What it was that changed this conclusion*, I don't remember.
d. *Right* you are!
e. The hens in the next garden: their droppings are very good dressing. *Best of all* though are the cattle, especially when they are fed on those oilcakes.
f. *Gone* are the days when the average man would be happy with soap on a rope in his Christmas stocking. Now he is more likely to ask for a body spray or shower gel.
g. *Standing on the step* was Father James Morrow, the Roman Catholic priest and pro-life activist who has threatened to bring a private prosecution for murder against the anguished couple if their son is allowed to die.
h. I had said he would come down and *come down* he did.

前置文は、情報の流れ (information flow) によって一部説明できるといわれる。前述したように、節は旧情報で始まるのが普通とされる。代名詞で始まる節の場合、代名詞はそれより前にあるものと照応している。たとえば、(9a) の *such* からわかるように、これより前の部分に指し示すものがある。ところが、情報の流れだけでは前置文の説明はできない。通常、代名詞は前出のものや聞き手にわかっているものを受け取る。したがって、文頭の代名詞はすでにわかっているものを受けているので、情報価値が低いと考えられる。ところが、代名詞であっても強勢があるものは文頭にこられる。いいかえれば、強勢のない目的語の代名詞は文頭の位置に生じない。したがって、前置された代名詞、たとえば (9b) の *this* は口語では強勢を受けることになるはずである。このことから、前置が強調を表しており、焦点になり、情報価値も高いといえる。ここでも、焦点が二つあることもありうるとわかる。

また、Biber et al. (1999) によると、前置される要素が目的語の場合は、強調あるいは対比する必要があるからわざわざ前置しているので、後に残った述部も前置された目的語も同じように強く焦点化されるという。これに対し、述部の前置は情報の流れと関係しているという。さらに、前置される要素が目的語の場合は、節の終わりの方が軽くなり、いわゆる頭でっかちのようになることがある。一方、(9d) のような述部の前置の場合はバランスが比較的良い。(9h) ようなエコタイプは新情報を伝えるはずがない。もちろん、前置された要素は強調される。

(9e) (9f) (9g) は述部の一部が前置され、be 動詞を介して主語がその後にくる例である。つまり、主語と動詞の倒置を伴っている例である。いわゆる倒置と異なる点は、述部の重さである。後述するように、倒置では動詞は存在を表す動詞か出現動詞が主に用いられている。それに対し、前置では、be 動詞を残してそれ以外の部分の述部が前置されるなど、述部が比較的内容をもったものであることが多い。

3.2 倒置文の特徴

倒置文には、主語と述部全体が倒置される場合と主語と助動詞⁵との倒置がある。後者の場合、残りの述部は主語の後にくる。どちらの場合も、もとの節のはじめにある主語ではなく主語以外の要素が引き金になっている。つまり、動詞を介して主語とそれ以外の部分が入れ替わった形式である。

まず、主語と述部全体の倒置をみることにしよう。

- (10) a. They found an extension to the drawing room with thigh-high cannabis plants growing in polythene bags full of compost. *Nearby was a 400-square-yard warehouse with more plants flourishing in conditions controlled by artificial lighting and automatic watering systems.*
- b. Here comes the first question.
- c. Then came the turning point of the match.
- d. Best of all would be to get a job in Wellingham. (Biber et al. (1999))

(10a) (10b) では、場所を表す副詞が文頭を占め、主語と動詞の位置が入れ替わっている。(10b) は出現動詞を伴っており、いわゆる提示文 (presentational sentence) と解釈されるものである。(10c) は時を表す副詞が文頭にきた例である。これらは、動詞が主語と入れ替わっているが、

このようなタイプの倒置ができるのは、動詞が主語よりも軽いからであるとされる。上記の例からもわかるように、ほとんどの動詞が連結動詞か存在を表すタイプか出現動詞のように提示を示すタイプである。

次に、主語と助動詞の倒置についてみることにしよう。このタイプはいわゆる部分倒置である。述部全体が主語と入れ替わるのではなく、助動詞の部分だけが主語を飛び越えている。

- (11) a. Not before in our history have so many strong influences united to produce so large a disaster.
b. Rarely are all the constraints on shape, function and manufacturing clearly defined at the commencement of the activity. Even less are they understood and their effect, one on another, recognized by the designer.
c. Only then did he feel better.

(11a) では have が, (11b) では are が主語である so many strong influences や all the constraints on shape, function and manufacturing を飛び越えている。注意すべきは、これらの例文では、文頭には否定語が現れているということである。否定語が倒置をおこす引き金となっている。(11c) では、限定的な意味の only が文頭にあり、do support によって助動詞が主語を飛び越えている。

3.3 分裂文の特徴

Declerck (1988) は分裂文は特定の文 (specificational sentence) で、that/wh 節を変項として、それに対して値 (value) を特定するという構文であると述べている。つまり、同定の情報 (identifying information) を与えているのである。

Declerck (1988) は分裂文を3種類に分け、それぞれ対比的分裂文 (contrastive cleft)、強勢のない前方照応的焦点をもつ分裂文 (unaccented-anaphoric-focus cleft)、継続性のない分裂文 (discontinuous cleft) と呼んでいる。(12) が対比的分裂文、(13) が強勢のない前方照応的焦点をもつ分裂文、(14) が継続性のない分裂文の例である。

- (12) a. Nobody knows who killed the old man. The police seem to believe that it was a tramp who did it.
b. What do you need? –What I need is a sheet of paper and a pencil.

- (13) It was also during these centuries that a vast internal migration (…) from the south northwards took place, a process no less momentous than the Amhara expansion southwards during the last part of the 19th century.
- (14) It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the weekend. On September 25, 1926, (…) he decided to establish a 40-hour week, giving his employees two days off instead of one.

対比的な分裂文は、that/wh 節が発話時点で聞き手の念頭にある既知情報である。従って、焦点は新情報で、a tramp には強勢があり対比的である。強勢のない前方照応的の焦点をもつ分裂文は that/wh 節が新情報で、焦点は前方照応的であるので既知情報である。継続性のない分裂文は、that/wh 節も焦点もともに新情報である。

Declerck (1988) は対比的分裂文で焦点を新情報としたが、小山 (2003) が実際の使用例を考察したところ、全くの新情報でなくいわゆるすでにわかっているものも焦点の位置に生じることがわかった。つまり、既知情報が焦点でも that/wh 節との組み合わせで新情報として聞き手に伝えられるということである。また、小山 (2003) では分裂文が情報の流れに逆らわずに新しくトピックを持ち込む役割を果たしているということ述べている。

次に、実際に新聞で用いられている有標的語順についてみることにする。

4. 新聞英語における有標的語順の使用

この章では、新聞英語における有標的語順の実際の使用分布を考察する。今回は有標的語順のうち前置文、倒置文、分裂文、do support の4種類について考察した。調査は、2005年3月18日から22日までの5日間の新聞英語を言語資料とした。これは、今回触れなかったが、同じ題材を扱ったニュース番組との比較、つまり、文語と口語の比較をするための予備調査であったため、ごく限られた期間になった。

実際に得られた上述の4種類の有標的語順は98例であった。内訳は、前置文21例(21.4%)、倒置文24例(24.5%)、分裂文45例(45.9%)、do support 8例(8.2%)であった。この結果からもわかるように、do support は情報の流れを導くというより強調としての色合いが濃いため、生起率が低いと考えられる。これは、新聞という中立的立場で出来事を述べるとされる言語資料であることを考慮すれば、当然の結果といえる。そこで、次のような仮説をたててみる。

- (15) 新聞英語では、有標的語順のなかでも強調や対比しか示さないタイプより、強調や対比もしつつ情報の流れに即してトピックの橋渡しの役割を果たすものが多く用いられる。

上述のように、前置文と倒置文は分裂文の半分の割合しかなかった。ということは、(15)の仮説にもとづくと、前置文や倒置文の方が分裂文より強調や対比の色合いが濃いといえるのではないだろうか。このことも含め、実際の使用分布を調べ、(15)を検証していく。

4.1 前置文と倒置文の使用分布

最初に、前置文についてみる。前置された要素別にみると、述部の一部が前置されている例が21例中3例(14.3%)、目的語が前置されている例が5例(23.8%)、補語が前置されている例が6例(28.6%)、副詞句が前置されている例が5例(23.8%)、主語が前置されている例が2例(9.5%)であった。主語が前置されているというのは、主語を明示しているがそのまま動詞が続かず、あらためて代名詞を主語にたてて文を形成しているタイプである。

- (16) A romantic melodrama in flashbacks, it has Castellitto's surgeon waiting for the result of a life-or-death operation on his teenage daughter, and taking time out to reflect on the vigorous rape, mumbled apology and lengthy affair he subjected Cruz to years before. (*The Daily Telegraph*, March 18, 2005)
- (17) ##⁶Unfortunately for Meen and Jack, these were not isolated incidents. Boarders at the school, they claim they were frequently and regularly sexually assaulted by Smith at any time of day or night, and the attacks were sustained over a period of several years. Meene and Jack were not alone. (*The Observer*, March 20, 2005)

(16)の文頭にある A romantic melodrama in flashbacks と (17)の二つめの文の文頭にある Boarders at the school は主語でありながら、その直後に動詞を続けることをせず、後ろに代名詞の主語をおき本来の主語が前置された形をとっている。あたかも主語をわざわざ独立させているかのようである。こうすることによって、主語を一段と際立たせ、二重焦点の1つになっている。たとえば、(17)は耳の不自由な児童への性的虐待の記事で、Meen と Jack だけが被害者ではなく主語である寄宿生たちもまた執拗に虐待を受けた被害者であることを述べている。このパラグラフでは、先の二人だけが被害者ではないということを証明するために、寄宿

生話をだしたのである。したがって、主語の寄宿生たちも述部も後続のトピックにはなっていない。あくまでも、証拠として強調しているのである。

次の(17)(18)は補語が前置されている例である。

- (18) ##Friends they may once have been, but now even this once-loyal group have turned, with their leader, congressman Peter King, calling for IRA's disbandment.

(*The Daily Telegraph*, March 18, 2005)

- (19) Nice though it is to see 20th Century Fox looking out for the little guy, Robot's anti-capitalist sentiment is laid on without noticeable wit or irony.

(*The Daily Telegraph*, March 18, 2005)

(18) はアイルランドの Sinn Fein 党の党首がアメリカ訪問をした際の記事で、この文だけでパラグラフが成り立っている。アメリカ議会のアイルランドの同胞を説明しており、かつては過激な考えを表明していて Sinn Fein 党と同胞関係だったかもしれないが今は違うということである。かつてのことを強調しつつ、また現在はそうではないということの後半に述べることによって、対比を生み出している。また、(19) は 20 世紀 Fox 社の映画を観ることは楽しいと強調しながらも、反資本主義者の感傷がそれとわからないようなウイットや皮肉にちりばめられていて、単に笑って見過ごせるものではないことを述べている。どちらも、前置した要素を強調しながらも後半でそれを打ち消す内容を述べており、対比の材料にしている。

(20) は述部の一部が前置されている例である。

- (20) ## This is a different election. Mugabe is, apparently, trying to play fair in the eyes of the world. Sadly, this is only a different election because he is being bad more subtly. Gone are the machetes. But, also gone too is the hope.

(*The Observer*, March 20, 2005)

(20) は民主化運動が一向に進まないジンバブエでの選挙に関する論評である。当選した Mugabe がよろしくないため、労働の象徴である鉈はなくなったが、希望もなくなったということ強調している。しかも、対句のように並べられている。ここでの焦点は、鉈と希望である。しかし、それがどうしたのかということ、なくなってしまったということである。何かについて何かを述べる時、もちろん何かについても重要であるが、それがどうなのかということ

も重要である。そういう意味で、先にどうなったかという述部を述べて、あとからそれが何なのかを示すこのタイプの有標的語順は読者の目を引きつける役目を果たしているといえる。

これらの前置文のなかで、トピックの橋渡しをしているのは10例(47.6%)で、ほぼ半分にあたる。とくに、前置した部分ではなく、後の部分で述べられたことがそのまま後続の文のトピックとなり、情報の流れに即した形である。

- (21) Lying on the pavement, six inches from the road, was a pair of woman's knickers—mauve lace with chocolate-brown borders. From the position, I would imagine that they had been thrown there from a passing car sometime the previous night.

You can decide for yourself what to make of this inappropriate disposal of lingerie.
My first reaction was negative. (The Observer, March 20, 2005)

上記の前置文の主語である a pair of woman's knickers は次の文のトピックでもあり、次のパラグラフでも lingerie と形を変えて登場している。このように、前置文は強調や対比をもちだして、さらにトピックを渡すという二重のはたらきをしているといえる。

次に、前置文より多くみられた倒置文についてみる。倒置の例23の内、16例(69.6%)がトピックの橋渡しをしている。これは前置文より高い確率である。

- (22) a. ##Now here comes Admiral, roaring along after increasing profits by 76pc in its maiden year as a quoted company. (The Daily Telegraph, March 22, 2005)

b. ##Then there came the new dawn after the darkness, Mr. Adams said, when the Clinton administration had finally welcomed him.

(The Daily Telegraph, March 18, 2005)

(22a) は自動車保険会社の話題である。この前のパラグラフで別の自動車保険会社の話が出された。そしてこのパラグラフで Admiral が登場し、この後のパラグラフでも Admiral の話題が続いた。したがって、倒置をすることによって、主語の Admiral に焦点をおき、後続のパラグラフのトピックを提示したことになる。(22b) は先ほどのアイルランドのシン・フェイン党党首の記事の続きである。暗黒時代の後に夜明けが、新しい時代がきたと党首が述べたことを伝えている。やはり、主語の後に副詞節を伴っており、主語に焦点が置かれていることがわかる。

両例とも文頭には *here* や *there* などの場所の副詞がきているが、これらは場所の意味というよりは形式的に本来の主語の位置を埋めているだけであるといえる⁷。存在文を示す *there* と同じである。したがって、これらは強調ではなく、場面を設定するように主語を提示するはたらしきをしていると考えられる。そのため、主語が後続のトピックになりやすい。

次の例は、出現動詞を用いていないが、副詞句が文頭に来ている例である。

- (23) ## 'After that are the boundaries and borders that head south from the Black Sea to Egypt and along the northern flank of Africa. It would be a match for the Great Wall of China any day'.
(*The Observer*, March 20, 2005)

これは中国の万里の長城に対抗して、*Hadrian's Wall* と *Lime's Wall* の世界遺産への登録をユネスコに打診したという記事である。問題の部分はドイツの考古学者の話である。この前のパラグラフで黒海までその壁を伸ばすという話があり、代名詞の *that* はそれを指している。情報の流れという観点からみると、前の部分を受けていて旧情報から新情報へという流れがうまくいっている。

抽象的な位置を表す句と主語の倒置もみられ、8例(34.8%)であった。

- (24) a. ## At the centre of the scandal are Michel Giraud, the former RPR president of the Paris area's regional council, and Michel Roussin, Mr Chirac's cabinet secretary during his stint as mayor of Paris and when prime minister in the 1980s, when the fund-collection operation was allegedly at its zenith.
(*The Daily Telegraph*, March 21, 2005)
- b. ## Among the dominant religions of Vanuatu are the "cargo cults" which are based on the belief that significant figures will return to the islands bringing with them "cargo" or gifts. One of these significant figures is Prince Phillip.
(*The Daily Telegraph*, March 21, 2005)

(24a) はシラク大統領の古参の取り巻きたちの賄賂問題についての記事である。スキャンダルの中心にいるのが、主語である。この場合は文頭でスキャンダルの渦中という場면을提示している。同じく (24b) もヴァヌアツ共和国の主要な宗教というフレームを提示している。その中に *cargo cults* があり、その説明に当たる関係詞の中の *significant figures* が次の文の主語に

きていることから、トピックを導入し、橋渡ししていることがわかる。

注目すべきは、(25)には(14a)の文頭と同じ *at the centre of* が使われているにもかかわらず、倒置がみられないことである。同一のスキャンダルでなくても、すでにスキャンダルの話がでているため、あえて状況設定をしなくてもわかるからであろう。同様に、*among* が使われているが倒置されていない。これも *collecting the funds* の話題がでているから、あらためて提示しなかったのであろう。

(25) *##Louise Yvonne Casetta of the RPR is among those accused of collecting the funds. Mrs Casetta as already at the centre of another party funding scandal involving fictitious jobs at the Paris town hall, which caused the downfall of former prime minister Alain Juppe.*

(The Daily Telegraph, March 21, 2005)

さて、否定辞が文頭にくる倒置もみられ、7例(30.4%)であった。

(26) a. *Not only does he answer when I come knocking, but he graciously steers me to a comfortable parlour in his house at Princeton, where his wife Joan has laid out a small feast of fruit, cheese, fish and bread. Quiet, tidy and book-lined, his home is so genteel that it seems almost profane to pose questions about bullshit.*

(The Daily Telegraph, March 19, 2005)

b. *##Nor is flower-power restricted to clothes. Every accessory you could ever need is printed with flowers.*

(The Daily Telegraph, March 21, 2005)

(26a)は倒置を含む文の後半に焦点があり、これが次の文でも話題になっている。同様に、(27b)もこの文で述べたことが次の文で証明されていることから、トピックが続いていることがわかる。

前置文と倒置文はいずれも有標的であるが、前置文の方が強調や対比の度合いが強く、倒置文の方がフレームづくりのような提示文的な要素があり、トピックを導入し、次へ橋渡ししていることが多いといえる。

4.2 分裂文の使用分布

最後に分裂文である。総数45例の内 *it* 分裂文は27例(60.0%)、*wh* 分裂文は18例(40.0%)

だった。この使用分布は、小山（2003）とほとんど同じ割合である。新聞英語では it 分裂文の方が wh 分裂文よりもやや多く用いられている。また、パラグラフの最初にあらわれる分裂文は全分裂文の内 22 例（48.9%）で、そのうち it 分裂文が 15 例、wh 分裂文が 7 例だった。また、パラグラフの最初にあらわれた分裂文で、トピックを導入したものは 19 例（86.4%）であった。パラグラフの最初でなくても、トピックを導入していた分裂文は 13 例あり、総数 45 例の内 32 例（71.1%）がトピック導入をしていることがわかった。これらの結果も小山（2003）が述べたように分裂文の役割は強調と同時にトピック導入をしているという結果を裏付けるものであった。

もちろん、分裂文は強調としての機能もじゅうぶんに果たしている。

- (27) ##Xanthe, 35, said: 'I try to tell myself that she was thinking about my boys. She worshipped them. She'd have been thinking that they needed their mum more than their grandmother.

"I have to believe it was them that she was thinking about, not me."

(*The Daily Telegraph*, March 22, 2005)

- (28) ## "We all know what the problems are and we all know what we have promised to achieve. What we need now is action".

(*The Daily Telegraph*, March 22, 2005)

(27) は殺人事件の被害者の娘の談話で、被害者である母ははとっさに娘をかばって犯人の前に立ちはだかり犠牲になった。娘には子どもがいて、子どもには母親が必要だからと、他ならぬ子ども（孫）たちのことを考えての行動で、娘である自分のことを考えていたのではないと信じようとしていることを述べている。文末に not me とあることで子ども（孫）たちが一段と強調されていることがわかる。(28) も同様に強調がおこなわれている例である。アナン国連事務総長が改革案を提出した話題である。アナン氏の談話で何が問題で何をやればいいのかわかっていないことと対比した形で、必要なのは行動することだということを強調している。

しかし、分裂文は強調や対比だけではなく、強調と同時にトピックの橋渡しという一挙両得の役割を果たしている。

- (29) ... The Catholics did suffer discrimination, as some of us witnessed, when the Unionists ruled unwisely before 1969.

It was such discrimination that brought the IRA into lawless action, set Belfast

ablaze, pulled in our Army and opened a generation of trouble. In the years since then, Sinn Fein/IRA have been exploiting in their own interests the power they won then. …

(*The Daily Telegraph*, March 18, 2005)

- (30) ##Clarke wrote to the Advisory Council on the Misuse of Drugs: ‘I want to be clear what influence the evidence presented within these studies has on the overall assessment of the classification of cannabis’.

It was only 15 months ago that Clarke’s predecessor, David Blunkett, reclassified cannabis from Class B to Class C, meaning it was no longer an arrestable offence to possess it. Cannabis is smoked by up to four million people in Britain every week, mostly on a casual basis.

Blunkett’s move to downgrade cannabis was welcomed by many, including this newspaper, as a sign of a more grown-up attitude to drugs in general.

(*The Observer*, March 20, 2005)

(29) における it 分裂文はパラグラフの最初にあらわれ、前のパラグラフの discrimination が焦点となり、それによって IRA の暴挙などが引き起こされたことを述べている。さらにこの IRA のことが次の文にもおよんでいることから、トピックとして導入されたことがわかる。すでにわかっている情報が焦点に生じていて、that 節によってもたらされた情報が、トピックとして次の文へ渡されている。情報価値の低い焦点であっても、that 節との組み合わせが新しい情報として伝えられる。(30) は焦点の位置には新情報がきており、that 節の方に前のパラグラフに出てきた Clarke を橋渡しにして、その前任者である Blunkett が cannabis の危険度を下げたことを新たなトピックとして導入している。そのことが次のパラグラフの主語としてあらわれ、トピックの橋渡しがおこなわれている。焦点の「15 ヶ月も前に」は確かに強調されているが、トピックにはなっていない。しかし、15 ヶ月前に Blunkett がおこなったことがトピックとして橋渡しされている。

このように、分裂文は強調と同時に、先の前置文や倒置文よりもトピックの導入や橋渡しの役目をしていることが明らかである。

5. おわりに

本稿では、新聞英語における有標的語順、特に前置文、倒置文、分裂文、do support を中心

に実際の使用をみてきた。使用率は分裂文が最も高く、次いで倒置文、前置文の順であった。また、この順にトピックの導入率も高く、したがって、これらの有標的語順をもつ文は強調や対比のみでなく、情報の流れにあった形でトピックを渡していくはたらきをもっていることがわかった。これらに対し、*do support* は使用率が一番低く、強調を伝えることが主たる機能であるといえる。前置文は倒置文に比べると技巧的なため、かえって、強調や対比、場面設定といった働きの方が前面に出ているといえる。一方、分裂文は *it* 分裂文でも *wh* 分裂文でもうまく情報の流れにのって、強調と同時にトピックを導入し、橋渡ししているといえる。つまり、これらの文は普通の語順と違うということで、読者の目を引きつけて、強調や対比を伝えながら情報の流れ、話題の橋渡しがうまくいくように機能している。

注

1. このタイプは学者によって文体倒置 (stylistic inversion) とも呼ばれるが、本稿では単に倒置 (inversion) と呼ぶ。
2. 本稿では、*it* 分裂文と *wh* 分裂文の両方を総称して分裂文と呼ぶ。
3. 口語では強調を表す場合、強勢や音調を用いる。もちろん、口語でも倒置や分裂文など文語と同じ表現も用いる。
他にも、強調を表す手段として強意語、再帰形、反復がある。
 - (i) It's *terribly* cold today.
 - (ii) She was honest *itself*.
 - (iii) No, no, no, not at all.
4. 新聞英語には (7) のような場所を表す副詞句が文頭にくる例がたくさんあるが、本稿ではこのようなタイプの副詞句や時を表す副詞句が文頭にくる例は扱わない。
5. Biber et al. (1999) は *subject-operator inversion* と呼んでいる。
6. パラグラフの最初であることを示す。
7. *here* を用いるか *there* を用いるかは、心理的距離の問題であると思われる。(22a) は現在の話なので *here* を、(22b) はクリントン政権時代というかなり前の話なので *there* を用いているといえる。

参考文献

- Biber, D. et al. eds. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Longman.
- Declerck, R. 1988. *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Clefts*. Leuven University Press.
- Huddleston, R. & G.K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of English Language*. Cambridge University Press.
- 久野 暉. 1978. 『談話の文法』. 大修館書店.
- Lambrecht, Knud. 1994. *Information Structure and Sentence Form*. Cambridge University Press.

小 山 久美子

- 中村 捷, 金子義明編. 2002. 『英語の主要構文』. 研究社.
- Prince, E. 1978. "A Comparison of Wh-clefts and It-clefts in Discourse". *Language* 54, pp. 883-906.
- . 1979. "On the Given/New Distribution". *Papers from the 15th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, pp. 267-78.
- Rochemont, M. 1978. "A Theory of Stylistic Rules in English". Doctoral dissertaion, University of Massachusetts.
- 高見健一. 1995. 「日英語の後置文と情報構造」. 高見健一編. 『日英語の右方移動構文』. ひつじ書房.
- 田子内健介, 足立公也. 2005. 『右方移動と焦点化』. 研究社.